

## 「青い時代」の自分に返る



昨年、前橋市で開催した高校の同窓会では、中心となって準備をすすめた矢端謙介さん

学。普通に就職活動をし、いくつかの企業に内定をもらった。社会人として順調なスタートを切ろうとしていた時、主体性をなくしている自分に気がついた。本当にやりたいことはなにかを真剣に考えたくて、もう一度

大学に入り直した。「これまでの人生を振り返ってみたら」。悩んでいた時、先輩が声をかけてくれた。高校時代、

なぜあんなに熱心に生徒会に打ちこんだのか。人に奉仕することがやりがいにつながっていた本来の自分を思い出した。

残りの大学生活では国内外のボランティア活動に没頭。公共の利益のためにアイデアを出し、お金を投融资できる今の仕事は「速回りしたけど、やりたかったこと」と胸を張る。

総務省のトップを務めた元事務次官の岡崎浩巳さん(63、1972年卒)には、群馬県以外にも「ふるさと」がある。これまでに勤務した長崎、秋田、北海道だ。「どの地方も自然、習慣、地形など全然違う。大好きな私の田舎です」と目を細める。

中学、高校とバレーボールに打ちこんだ。高校では2年連続で関東大会に出場。3年生の春で部活が終わると心機一転、勉強モードに。夏休みはそれまでにないほど勉強した。そのかいあって、休み明けの校内模試で学年トップに。「母親はカニングを疑っていたけど、上位を取り続けたらやっと納得した」と笑う。

東京大学法学部に進学後も俊才におくれをとらないよう勉強を続けた。当時は東大を卒業して官僚を目指す人が多く、総務省の前身、自治省に入った。「田舎出身だから、地方に勤務できる省庁がよかった」という。

地方の人たちとのつながりは今も続いている。新年のあいさつで、年賀状は毎年千通、メールは200〜300通送る。現場を大切にしてきた証だ。(谷野朝香)



次回は兵庫県・神戸女学院高等学部です。



「選挙に出ると言われたこともあったけど、仕事が楽しくてやめられなかった」と話す岡崎浩巳さん